武蔵村山市立歴史民俗資料館報

資料館だより

第 5 号

昭和60年 7 月25日

編集・発行　武蔵村山市立歴史民俗資料館　　武蔵村山市中藤6343 TEL0425(60)6620

画 像 板 碑 (年代不詳)
(64×34.5cm下欠)(34) ― 真福寺蔵 ―

特別展示　「武蔵村山市の板碑（いたび）」

1.　はじめに

板碑とは、仏を供養するための卒塔婆の一種で、これを造立することは、寺や堂などを建立することと同じ意味を持つと言われており、造立する人、すなわち供養者が仏に対し善根功徳（ぜんこんくどく）（良い行いをする事）を施すことを意味するものとされている。

板碑のうち、特に関東地方のものは、秩父で産出する青石、「緑泥片岩（りょくでいへんがん）」を材料としたことから、青石塔婆と呼称されることもあるが、一般的には板碑と呼ぶ。

この板碑は、私たちが中世と呼ぶ時代のはじめ頃に生まれて、近世の到来を前に姿を消した。

武蔵村山市における板碑の調査は昭和54年に行われ、この結果は「武蔵村山市文化財資料集（武蔵村山市の板碑）」として、昭和56年３月に報告書が発行されている。この報告書では市内に現存する122基の板碑が紹介され、さらにその後２基の新たな板碑の確認がなされたことにより、現在での武蔵村山市の板碑の総数は124基を数えている。

そこでこれら武蔵村山市の板碑を広く紹介するため本年７月17日～９月14日までの間、資料館特別展示「武蔵村山市の板碑展」を企画したところである。

この特別展では、板碑実物22点、拓本７点、写真８点の展示を行い、板碑をとおして中世における武蔵村山市の一端を浮き彫りにするとともに、文化財の保護の大切さを求めるものである。

2.　武蔵村山市の板碑

⑴　板碑の造立の推移

武蔵村山市の板碑、総数124基の内、紀年銘が判明している板碑は、正応３年（1290年）銘板碑（図版Ⅰ－１）から享禄４年（1531年）銘板碑までの240余年の間に造立された83基である。

前記のとおり、市内の板碑は13世紀の終りごろに始まり、このころの初期の板碑は市内でも大型に属するもので３基が確認されている。板碑の数的には、14世紀1360年代に最盛期を迎える。特に、貞治銘のものは市内に７基を数え、この中でも貞治３年銘の板碑（図版Ⅱ－２）のごとく天蓋・梵字光明真言などの装飾を施こした入念なものもある。

そして、15世紀の1420年代に、一旦造立が落ち込むものの、1440年代には再び造立を盛り返し、やがて、16世紀前期の一基の造立をもって市内の板碑は消滅する。

武蔵型板碑の消長が、嘉禄３年（1227年）銘板碑を最古とし、16世紀終末期までの400年に近い期間造立されたのに対し、武蔵村山市の板碑の消長は、遅く始まり、早く終る短い軌跡と言えよう（第１表参照）。

なお、報告書「武蔵村山市の板碑」発行後発見された板碑の内、紀年銘が判明できるものは、文安３年（1446年）銘、阿弥陀三尊板碑（図版Ⅲ－６）の１基だけである。

⑵　板碑の形態の特徴

市内の板碑の内、その３基に二種の偈が刻まれている。正応３年銘板碑（図版Ⅰ－１）には、

「光明遍照　十方世界　念仏衆生　摂取不捨」

「其仏本願力　聞名欲往生　皆悉到彼国　自致不退転」

とある。また、貞治４年（1365年）銘板碑には「光明遍照 ── 」の偈が見られ、図版Ⅲ－７で示した板碑には「十方世界」の偈が見られる。そもそも板碑は、仏体としてあつかわれ、従ってそれに装飾を施こしたり、讃嘆する偈を伴ったりする。偈とは、経典の真随を端的に言い表したものである。

―光明真言―

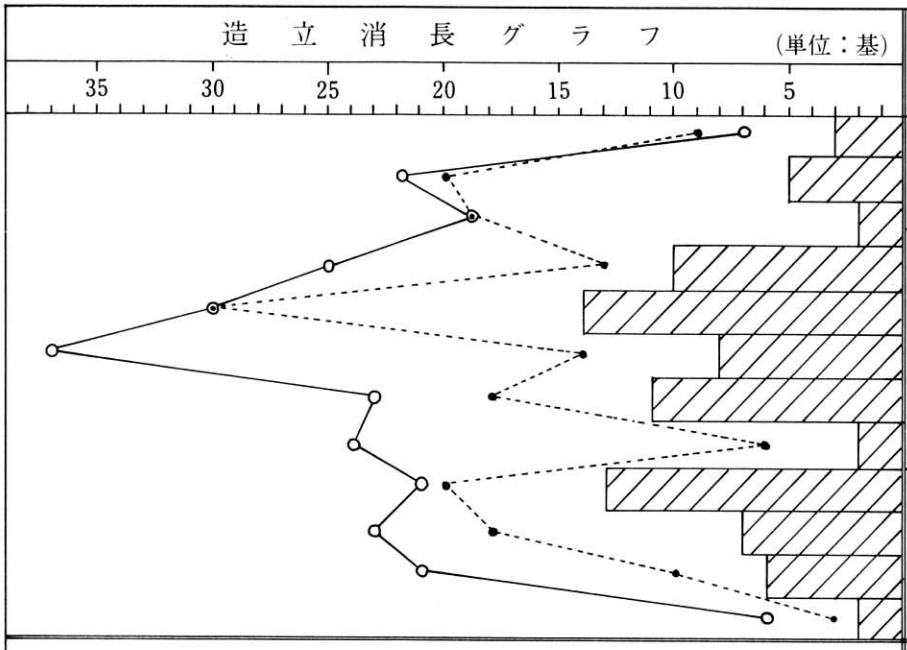
梵字光明真言を刻む板碑は、市内で８基を数え、そのほとんどが、紀年銘左右に２行に分けて配したものである。年代的には、南北朝から室町時代の初めに集中しており、入念な作りで、比較的大きめの板碑である（図版Ⅰ－４、Ⅱ－２・３、Ⅲ－１）。

―逆修銘―

市内の板碑10基に、逆修の銘が見られる。年代的には、南北朝期のものが多く、「逆修善根」と刻むものが２基、単に「逆修」と刻むものが６基（図版Ⅱ－２、Ⅲ－１・２）、さらに法名と連なるもの（○○逆修）と刻まれているものが２基ある。

―天　蓋―

仏の頭上を覆う荘厳の笠のことで、この種の板碑は



年代区分	(20年単位)	基数	偈	光明真言	逆修銘	天蓋	花瓶	線刻蓮座
鎌倉時代	1281～	3	1					
	1301～	5						1
	21～	2						1
南北朝時代	41～	10						
	61～	14	1	1	3	1		
	81～	8		3	1			
	1401～	11		3	2		1	
	21～	2						
室町時代	41～	13		1	2			
	61～	7						
	81～	6						
	1501～	2						
紀年銘不詳		41	1		2	1	1	1
合計		124	3	8	10	2	2	3

第１表　武蔵村山市及び狭山丘陵南麓と北麓における板碑造立の推移

市内では２基みられ、いずれも絵画的にすぐれた描写が感じられる（図版Ⅱ－２）。他の２基は、個性豊かで独創性があり、頭部二条線切込みの作りなども考慮すると、鎌倉時代末期のものと推定される。

―花　瓶―

花瓶が板碑に彫り付けられるようになるのは、鎌倉時代末期から現われる。市内には２基みられ、いずれも描写は雅拙、粗略であり、三茎型で中央が開花、左右がつぼみの蓮華である。

―線刻蓮座―

蓮座は一般に種子と同じ薬研彫り（断面がＶ字形）を通常とするが、鎌倉時代末期のものにしばしば線刻のものがみられる。市内ではこの種の板碑が４基あり（図版Ⅲ－３）、その内３基は鎌倉末期、若しくはそれと推定できる。画像板碑（表紙）にも線刻蓮座が刻まれており、これは室町時代の画像板碑にときどきみられるものであろう。

⑶　板碑からみた信仰

板碑中央に彫られた本尊（種子）によって信仰の内容がうかがわれる。市内の板碑124基の内、種子が判読できるのは73基で、その内阿弥陀種子が67基と圧倒的に多く、この他は、大日種子２基、釈迦種子３基、地蔵種子１基である。

―阿弥陀種子―

総数67基の内、阿弥陀一尊（図版Ⅰ）を種子とする板碑が圧倒的に多く、44基を数えている。これに比べ阿弥陀三尊（図版Ⅱ）のものは画像板碑を含め17基と少なく、残りの６基は、板碑自体の欠損のため、区別がつかないものである。

表紙で紹介した画像板碑は、阿弥陀如来が念仏行者の死を迎えに来る図であるが、板碑の下部が欠損しているもののほとんど磨耗はみられない。

―大日種子―

市内の２基（図版Ⅲ－１・２）のいずれも金剛界大日如来を主尊とする室町期の逆修板碑である。特に図版Ⅲ－１で紹介する大型の板碑は、不動明王（右側）、毘沙門天王（左側）を脇侍とする異型の金剛界大日三尊種子である。

―釈迦種子―

市内３基（図版Ⅲ－３・４）の内、紀年銘のあるものは嘉元２年（1304年）銘の１基のみである。この他の２基も型態的にみて同年代のものと推定される。

―地蔵種子―

市内には延徳２年（1490年）銘の１基（図版Ⅲ－５）のみである。高さ45㎝、幅15㎝の板碑で、市内では最小に属する板碑と思われる。

1

光明遍照　其仏本願力
十方世界　聞名欲往生
正應三年十一月日
念仏衆生　皆悉致彼国
摂取不捨　自至不退転

170×38.5/45.5×4.5(二折)　1290 (29)

2

88×25.5×2.0 (完)

暦応二年八月日

1339
(50)

3

58×19.5×　(完)

貞治二年十月日

1365
(16)

4

84.5×26.5×3.0 (完)

○○○○○○○
○○○○○○○
教光

○○○○○○○
○○○○○○○
禅門

應永五年戊刀七月廿八日

1398
(43)

5

43×13×1.5

長禄二年十一月七日

妙
禅尼

1460
(71)

阿弥陀一尊板碑

1

105×29.5×2.7（完）

永仁□

1293－8

（14）

3

89×26.5（二折）

○○○○○○
○○○○○○
貞治三年甲辰六月日了道逆修
○○○○○○
○○○○○○

1364

（110）

5

65.5×20.5×21.7

明阿弥
延徳二年三月十三日
禅尼

1490

（48）

2

113×30.5×3.0（完）

○○○○○○
○○○○○○
明徳二年癸酉七月十日
○○○○○○
○○○○○○
昌貞
禅尼

1393

（42）

4

57×16（完）

道祐
寛正七年四月廿八日
禅門

1466

（86）

6

65×20×3.5

道泉
明徳七年二月廿日
禅門

1501

（120）

阿弥陀三尊板碑

図版Ⅲ

新しく発見された板碑

大日板碑

1

大日　不動
毘沙門　応永十三年　丙　○○○○○○○○
○○○○○○○○　戌　八月時正逆　朝尊阿
○○○○○○○○　修　1406　○○○○○○○○
○○○○○○○○　(31)　○○○○○○○○
○○○○○○○○　闍　梨

80×31.5×2.7（略完）

釈迦板碑

3

嘉元二年八月日　1304
(49)

46×17.5×2.0（略完）

4

22.5×15.5×2.0　(58)

6

文安三年十一月五日　妙性
禅尼　1446

68×20×1.8（完）

地蔵板碑

2

応永十三年二月　法得
逆修　1406
(47)

32×16.5×2.3

5

延徳二年六月廿八日　道善
1490
(90)

45×15.5（略完）

7

十方世界

29×14.7（破片）

武蔵村山市の庚申塔

現在、市内には２１基の庚申塔が確認されています。このうち、すでに館報で１２基の庚申塔を紹介しましたが、今回引き続き３基の庚申塔を紹介します。なお、分布図及び庚申塔の形については館報第２号を参照してください。

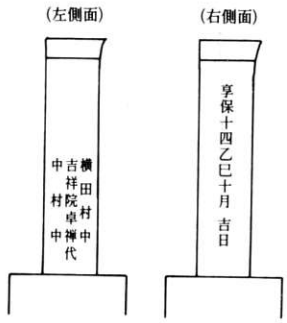
吉祥院の青面金剛塔（写真１　分布図№１２）

吉祥院石段入口の両脇に馬頭観音と庚申塔が建てられている。庚申塔は高さ１２０㎝、幅４６㎝の平柱状で、正面上部に日月瑞雲を刻み、下部には二鶏三猿を配している。中央には合掌六手の青面金剛が浮彫りされている。塔の右側面には「享保十四乙巳十月吉日」と刻み、左側面には「横田村中　吉祥院卓禅代　中村中」と三行に刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第１４番　横田村吉祥院石坂下小祠　享保十四年十月」と記されている。

この庚申塔は現在でも厚く信仰されており、わらじや千羽鶴、絵馬などが奉納されている。

写真１　吉祥院の青面金剛塔



波多野家の庚申塔（写真２　分布図№１３）

大字中藤の波多野喜一氏の庭に文字庚申塔が建てられている。この庚申塔は高さ６８㎝、幅３８㎝の自然石で、正面に「庚申塔」と大きく刻み、その左端に「波多野氏」と彫られている。裏面には「元治二乙　年正月吉日」と刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第１６番　同村見世の屋敷尻道角　波多野氏建立玉川石也」とあり、明治初期には道路からこの庚申塔を見ることができたのであろう。この庚申塔は村中や講中で建立したものでなく、個人によって建てられたものである。

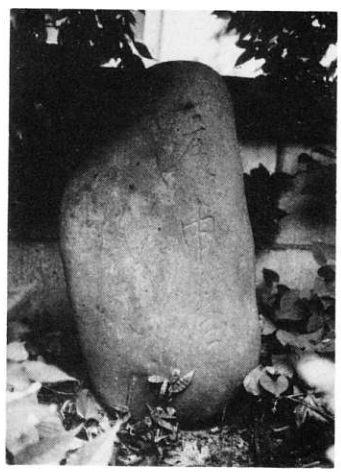
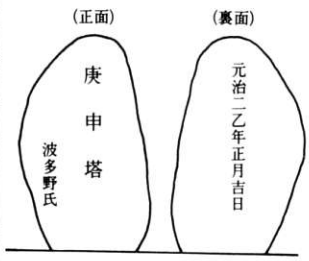


写真２　波多野家の庚申塔



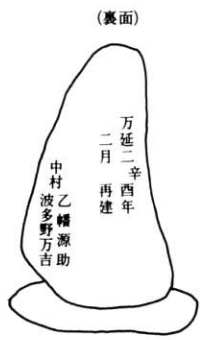
乙幡家の庚申塔（写真３　分布図№１４）

大字中藤の乙幡常春氏の庭先に文字庚申塔が建てられている。この庚申塔は高さ７１㎝、幅４４㎝の自然石で、正面に「百庚申」と刻み、裏面には「万延二辛酉年二月再建　中村乙幡源助　波多野万吉」と刻まれている。

「百庚申」の文字を刻む庚申塔は埼玉県や群馬県には多く見られるが、東京都では数が少く、珍しいものである。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第１５番　同村山王前源八より三軒目屋敷角　百庚申供養塔玉川石也」と記されている。

写真３　乙幡家の庚申塔



文化財アラカルト②

民俗コーナー　「囲炉裏（イロリ）」

囲炉裏は、炊事、暖房、照明などの機能を持ち、また、一家の団らんの休息や、夜業仕事にもその炉辺があてられた。

囲炉裏の語義は明らかになっていないが、その名称は、地方によって様々である。囲炉裏の他に「イルリ」、「ユルイ」などの表し方も広く行なわれている。

北陸地方では、これを「インナカ」又は「エンナカ」と言い、その意は、「居る中」すなわち居座する中央の場所を示した名称である。

炉の中央をカマドと言っている地方では、「イルブチ」と言い、九州地方では、「イジロ」と言う。

これらから推測しても、囲炉裏が家の中心の居場所を示した言葉であることがよくわかる。

生活様式の変化に伴い、昔なつかしい囲炉裏は、現在武蔵村山市では、まったくみることができなくなった。右の写真は昭和42年当時、市内中藤で撮影されたものである。

昭和60年度　資料館事業（実施を含む）

展示活動

常設展示　「武蔵村山　その自然・歴史・民俗」
　期　間　　年間展示

特別展示　「武蔵村山市の板碑」
　期　間　　7月17日(水)～9月14日(土)

作品展　「子供達が作った縄文土器」
　期　間　　8月25日(日)～9月29日(日)

写真展　「武蔵村山の今と昔」
　期　間　　12月1日(日)～12月28日(土)

講座・教室

古文書講座「初級講座（古文書解読の手ほどき）」
　5月28日(火)～8月6日(火)までの隔週火曜日
　「中級講座（古文書から近世史を学ぶ）」
　10月1日(火)～12月24日(火)までの隔週火曜日

歴史講座　「武蔵村山市の板碑について」
　7月21日(日)
　「板碑の見学会」
　9月1日(日)

体験教室　「古代食の料理と試食」
　8月4日(日)

縄文土器づくり教室
　8月1日(木)・2日(金)（土器づくり）
　8月11日(日)　　（土器焼き）

子供自然教室　「武蔵村山市の地形と地質」
　8月27日(火)～8月30日(金)

文化財映画鑑賞会
　7月28日(日)　武家社会と鎌倉文化
　　元禄文化
　9月22日(日)　多摩川をさかのぼる
　　植物の分布
　11月24日(日)　檜原村の式三馬
　　武蔵野開発第一号
　1月26日(日)　東京百年
　3月23日(日)　星の動きを調べる
　　地層のできかた
　　自然界のつりあい

なお、資料館事業の詳細についてのお問い合せは、
歴史民俗館資料館
(60) 6620までお願いします。